

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018年度
氏名	常盤 由紀子	指導教員 (主査)	小池 眞規子

論文題目	過剰適応傾向と孤独感の関連 ——友人への過剰適応行動に着目して——
------	--

本文概要
<p>【問題と目的】 過剰適応傾向とは石津・安保（2008）によれば，“環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり，内的な欲求を無理に抑圧してでも，外的な期待や要求に応える努力を行うこと”である。ただし，従来の研究は定義や概念が統一されておらず，多くの課題が残されている（風間，2017）。なかでも，過剰適応のパーソナリティ（過剰適応傾向）と行動（過剰適応行動）の双方の関連を検討したものは少なく，環境要因についても十分な検討がなされていない。</p> <p>そこで，本研究では大学1年生の入学時と半年後の学科の友人に対する過剰適応行動に焦点を当てる。そして，過剰適応傾向と環境要因である時期の相互作用が，過剰適応行動に及ぼす影響について検討を行い，各変数と孤独感の関連を検討することを目的とする。</p> <p>【方法】 360名に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は，①フェイスシート，②入学時の学科の友人への過剰適応行動尺度，③現在の学科の友人への過剰適応行動尺度（②と③は鈴木・五十嵐・吉田（2015）の親密な二者関係における過剰適応行動尺度を，一部改変），④大学生用過剰適応尺度（石津・齊藤，2011），⑤改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版（諸井，1991）であった。</p> <p>【結果】 300名を有効回答者とした。過剰適応傾向で回答者を K-means 法によるクラスタ分析で「過剰適応傾向群」，「自信喪失群」，「自由奔放群」，「他者志向群」の4クラスタに分類した。</p> <p>群と時期を独立変数，過剰適応行動を従属変数とした二要因混合計画の分散分析を行った。群の主効果 ($F(3,260)=36.54, p<.001$) と時期の主効果 ($F(1,260)=65.49, p<.001$) が有意であり，交互作用はみられなかった ($F(3,260)=1.03, n.s.$)。多重比較の結果，過剰適応傾向群，他者志向群，自信喪失群，自由奔放群の順に得点が高かった ($p<.001 \sim p<.05$)。しかしながら，過剰適応傾向群の過剰適応行動は入学時が 3.87 点 ($SD=1.26$)，現在が 3.27 点 ($SD=1.31$) であり，パーソナリティに対してそれほど高いものではないことが明らかになった。</p> <p>各群の孤独感は一要因分散分析の結果，群間で有意差がみられた ($F(3,273)=18.00, p<.001$)。多重比較の結果，過剰適応傾向群と自信喪失群は他の群より，孤独感が高いことが示された ($p<.001 \sim p<.01$)。</p> <p>入学時から現在の過剰適応行動の差から回答者を「増加群」，「低下 L 群」，「低下 H 群」に分類した。各群を独立変数，孤独感を従属変数とした一要因分散分析を行った結果，群間での有意差がみられた ($F(2,266)=3.27, p<.05$)。多重比較の結果，増加群は低下 L 群より孤独感が高いことが示された ($p<.05$)。</p> <p>【考察】 過剰適応傾向の程度に関係なく，新奇場面では過剰適応行動が増加し，時期を経ることで減少することが明らかにされた。過剰適応行動の程度は，過剰適応傾向というパーソナリティ要因の影響も受け，その量には違いがみられた。一方で，新奇場面よりも環境に適応したと考えられる時期に，過剰適応行動が増加した青年は孤独感が高いと示された。このことから，新奇場面は過剰適応行動が高まり，それゆえに不適応や心理的問題が生じるリスクの高い時期であると解釈される。したがって，新入生が早く大学に馴染めるようなイベントを行うなどの支援が必要であると考えられる。また，過剰適応傾向が高い青年は過剰適応行動が多くはないが，孤独感が高いことが明らかにされた。これは過剰適応行動の多さからではなく，気持ちと行動のギャップにより心理的問題が生じている可能性が示唆された。適切な自己表現の方法を獲得させることでギャップが少なくなり，孤独感の低減に寄与すると考察される。</p>